

Japan Leather Award
2024

ジャパンレザーアワード2024

ジャパンレザーアワード2024

選定作品

17回目の開催となった国内最大の革製品コンテスト「ジャパンレザーアワード」。

応募作品数281点から、審査員により評価された「選定作品」は89点。

この中から各部門賞およびグランプリが決定された。

デザイン力・商品力のある作品から意欲的な作品まで、まずはその選定作品を一挙ご紹介。



新井 康之さん

溢れる個性の
応援サンダル

株式会社新井商店



太田 駒子さん

ひとりひとり
個性の違う子供たちへ

個人



大山 一哲さん

グリーンウォーキング
シューズ

株式会社ロカシュー



菊池 敏哉さん

自然と技の一足

個人



北嶋 浩治さん

みやこスリッポン
レディース

北嶋製靴工業所



北嶋 浩治さん

吉野チャッカ
メンズ

北嶋製靴工業所



関口 善大さん

色とりどり 繫いだ靴

関口善大靴工房



高橋 隆幸さん

Dear Deer

個人



瀧本 武さん

DECOナチュラル
オイルヌメver.

個人



橋本 啓佑さん

vintage

個人



鬼塚 希樹さん

モス

カワノ株式会社



北嶋 浩治さん

吉野チャッカ
レディース

北嶋製靴工業所



北嶋 浩治さん

大和スリッポン

北嶋製靴工業所



園田 尚生さん

Sunny-shoe

靴工房Ellgon



田中 詩織さん

無垢*muku*

田中京商店



中口 智仁さん

エポカルタン靴

shoes studio tomo.ni



藤原 崇晃さん

シルバースューズ

藤原化工株式会社



三上 良弘さん

レジェンドシューズ
車椅子専用

株式会社ネーカース



井澤 知也さん

国産ビッグスウェード
ハンドバッグ

個人



井上 めぐみさん

Potiron

フェアート



上原 勇七さん

燻(ふすべ)の信玄袋

株式会社
印傳屋上原勇七



岡田 憲樹さん

赤色小札
黄銅鍍背囊具足

株式会社村瀬鞆行



菊池 健治さん

Flap Shoulder Bag
Black Regular

KIKUCHI LEATHER



小早川 淳さん

革好きのための
リュック

個人



佐藤 周平さん

折りたためる
レザーバッグ

エース株式会社



椎名 賢さん

knapsack

Ken Shiina
Design Laboratory



末田 香菜恵さん

ツインボトルバッグ

個人



杉浦 未来さん

旅を共にする鞆

個人



関口 嶺さん

GETA Bag

裁ち縫ふひと



高橋 幹大さん

コーヒートート

個人



高山 祐輝さん

Tawami

個人



田島 隆治さん

円相光

atelier SWL



鶴田 雅子さん

ソフトコンタクトケース
専用ポケットが
ついてるトートバッグ

ハンズたかおか



成田 香澄さん

Brass clasp
2way バッグ

soul;solid



古田 光さん

transFer-m

billknocks



正木 季子さん

En バックパック

株式会社鞆工房山本



森 健さん

ミニダレスバック

Mori Factory



安田 祐樹さん

Couche

株式会社吉田



沖石 吉華さん

水で仕上げる
ヌメ革バッグ

Jackie's Products



小島 嘉剛さん

かえるばっぐ

個人



小島 嘉剛さん

きんぎょばつぐ

個人



椎名 賢さん

scratch pattern

Ken Shiina
Design Laboratory



鈴木 梨紗さん

Shutter Chance

個人



住田千佳さん

マトフ

個人



寺田 尚由さん

鞍ショルダー 大

株式会社いたがき



西村 豊さん

真竹身籤網代編希釈
本漆塗内一閑張
外牛革縫付背囊

個人



野沢 浩道さん

ドレスバッグ

個人



野尻 英利さん

バイオリンの
スマホポシェット

OXIO-CRAFT



古田 光さん

スカイピングトート

billknocks



横山 羅生さん

アシスタントディレクター

杉野服飾大学



横山 羅生さん

無骨と曲線

杉野服飾大学



大熊 啓一さん

革を楽しむ 無垢な
コンパクトウォレット

AZUMAYA



加藤 友樹さん

ラムジャケット

有限会社 T.M.Y's



加藤 友樹さん

Gジャンタイプ
ジャケット

有限会社 T.M.Y's



加藤 友樹さん

一枚仕立てシャツ

有限会社 T.M.Y's



加藤 友樹さん

カーフレザーで作る
A2ジャケット

有限会社 T.M.Y's



工藤 大貴さん

セミダブルライダース

PANDEMIXXX



小出 恵さん

スラッシュドレス

個人



澤海 敦さん

PAN WALLET

個人



野村 孝之さん

革ときもの地との
コラボコート

革きものアルティジャーノ



矢野 悟さん

ミルフィーユ

バンビマニファクチャリング
株式会社



石橋 善彦さん

バンチングレザー
刺し子ライダース
ver.2 type.Tattoo

有限会社オベリスク



石橋 善彦さん

バンチングレザー
刺し子ライダース
ver.3 type.Bandana

有限会社オベリスク



恒田 祐介さん

かわのふく
[直心是道場]

個人



西村 俊樹さん

作務衣

Dart



石神 聡一郎さん

FRUIT PILLOW

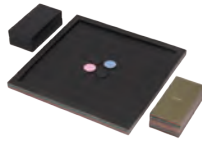
個人



遠藤 幸作さん

GBベンケース

国立商店株式会社



亀 流雲さん

オセロ

個人



能澤 大輔さん

宅配ボックス

青森県立
青森第一高等養護学校



谷藤 嵩さん

ZUDA-KKG2

個人



野口 正人さん

アイアンレザーツール

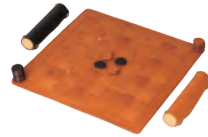
ルボア株式会社



吉川 尊雄さん

オトナノメイシイレ

レザーメイキング
ヨシカワ



浅岡 純己さん

イントレチャート・
リバーシ

個人



家成 宣紀さん

希求

個人



池田 宜弘さん

撫でだるま

株式会社
ラストドリッデザインズ



井藤 憲一郎さん

カワハザイリュウ

創作工房 井藤



河本 静香さん

革あそびの茶箱

sunao



瀬之口 英信さん

雅
(伊勢海老ベンケース)

アート・ヒデ



高松 智明さん

赤林松

(有) グランツ



谷川 史憲さん

古びた飛行船

個人



戸辺 義昭さん

宝物

Your Side Door



中山 智介さん

盛革細工
緋急須 -AkaKiyusu-

銀職庵水主



村上 和夫さん

パイレーツ・オブ・
レザーダール

ヤング産業株式会社



青田 茄乃可さん

革暖簾

兵庫県立
姫路工業高等学校



国田 来愛さん

shell of memories

兵庫県立
姫路工業高等学校



宮代 結菜さん

Floracion

上田女子服飾専門学校



盛田 結子さん

筋肉リュック

奈良芸術短期大学



山本 海翔さん

UNKNOWN

専門学校ヒコ・みづの
ジュエリーカレッジ



吉田 謙太さん

Fusion

文化服装学院

受賞作品詳細は
こちらへ





石橋 善彦さん

ISHIBASHI Yoshihiko

作品名

パンチングレザー刺し子ライダース
ver.3 type.Bandana

所属

有限会社オペリスク

受賞動画を
配信中!



制作依頼はこちらから
または
03-5833-0737



トランスフォーム機能で進化 新生“刺し子ライダース”

「革×刺し子」という斬新な組み合わせで、2023年度グランプリを受賞した石橋善彦さん。なんと、2024年度も見事頂点に輝いた。今作も再び刺し子を施したジャケットだが、そこに進化があればこそその2年連続受賞。細部にまでこだわりの光る作品づくりに迫る。

今作のメインテーマは、「トランスフォーム」。付属のネックウォーマーは、外した際にジャケットの裾にボタンで取り付けることができ、さらにその中に同じく付属のグローブを収納できるポケットがある。グローブを単に放り込む形ではなく、中のフックボタンから吊り下げられる仕様で、燕尾に役割を変えたネックウォーマーの美しいフォルムを壊さない。

「自分自身、冬はいつもネックウォーマーと手袋を愛用しているんです。でも、あたたかい屋内に入って外した時に、問題になるのは置き場所。僕はあまり鞆を持たないので、いつもそのやり場に困っていたのが、作品誕生のきっかけです」

長年の着用を想定し、随所に設けられた修理用ファスナーは、前作から引き続き健在。切りっぱなしのように見える袖の裏地

も、縫い付けないことで裏地との間に手を入れて刺し子の修復を可能にしている。デザインと機能性を見事に両立した設計になっているのだ。

もちろん刺し子模様についても、前作から大きな進化を遂げた。

「前は、刺し子初挑戦ということもあり、伝統的な和風の柄を採用しました。対して今作は、糸をあえて革と同色にして全体の一体感を出しつつ、柄はバンダナをイメージしたアメカジ風の大胆なものにしています」

革は、羊のタンニンなめし。最終的に洗いをかけてシワをつけることで、ヴィンテージのような雰囲気を演出している。

そのアメカジムードをさらに盛り上げるのが、背面のワッペンだ。これは、石橋さんのふたりの娘の名前がモチーフになっている。

「それぞれ『W』『M』で始まって、『O』で終

わるとバランスが良くなって。デザインに落とし込んだ時のことを考えながら、生まれた時に名前をつけたんです」

今後オーダーを受ける際には、注文者のリクエストに応じて文字をカスタマイズすることを想定している。

じつは石橋さん、昨年のグランプリ受賞作品を完成させたあと、「もう刺し子はやらない」と、心に決めていたという。

「昨年の作品は、刺し子だけで40時間かかったんです。あまりにも大変だったのでこれが最初で最後、と思っていたのですが、まさかのグランプリ受賞。お礼の意味を込めて派生作品をつくろうという気持ちになり、今回は2作品、前回の作品と併せて3部作になる形で制作しました。結果、今年は1体に150時間かかったので、刺し子だけで合計300時間です(笑)」



模様が見えやすいよう、白い糸でデモンストレーションをしてもらった。細やかなパターンが際立つ

空き時間の活用で 広がる可能性

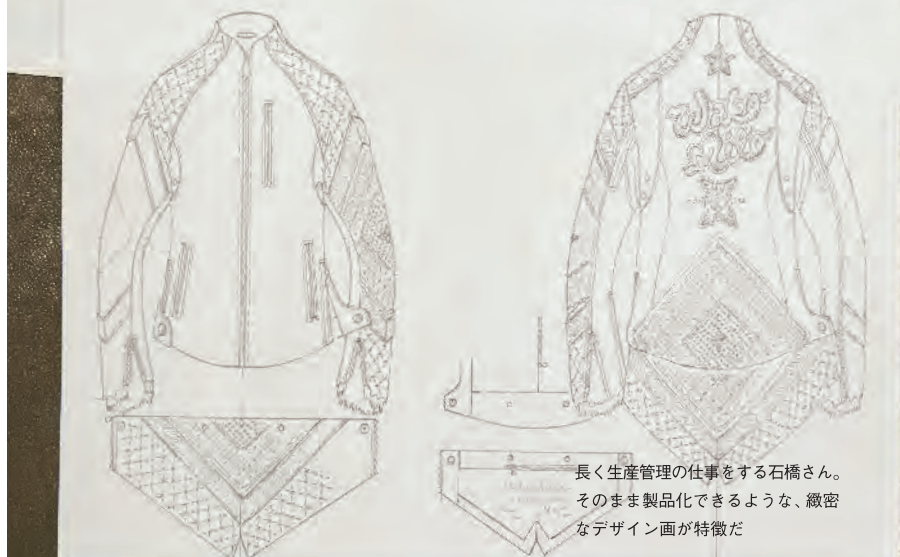
現在石橋さんは、レザーブランド「オベリスク」でプロダクトマネージャーとして勤務している。忙しい毎日の中で、一体どのように制作時間を確保したのだろうか。

「娘のサッカーの練習に付き添うと、どうしても手持ち無沙汰な時間が出てくる。その時に刺し子はぴったりだと思って、現地で作業をしていました」

空き時間を活用することで、ものづくりの可能性は無限に広がる。費やした膨大な時間には、そんなメッセージも込められているのだ。

幼い頃からものづくりが好きだったという石橋さん。大好きなプラモデルは、いまの仕事場にもその箱が置かれていた。

「気分転換に、たまにつくるんです。もうこれで最後にしようとは思っているんですけどね(笑)。でも、プラモデルと革製品って、ちょっと似ているところがあるように思うんです。接着剤とかテープとか、一般的な布の服には使わないような材料も使って、立体的に組み立てていく作業なので」



長く生産管理の仕事をする石橋さん。そのまま製品化できるような、緻密なデザイン画が特徴だ



今回の刺し子のように、細部にまでこだわって色や模様を仕上げていくという面でも、レザーアイテムにはプラモデル的なおもしろさがあると、石橋さんは話す。

レザーアワードにはこれまで8回ほど出品しているが、「いいものができたら、出す」という、気負わぬスタイルは変わらない。「仕事と創作活動は、はっきり切り分けています。お客様に提供する商品は、ミシンのひと目で仕上がりを追求して、プロとして責任をもったものづくりを。創作活動は、あくまで空いた時間や休日に、好きなことを。とことん自由に取り組んでいます」

最後に、これまでつくった作品のなかで一番のお気に入りを聞いてみた。「やっぱり、今回受賞した作品ですね。でも、死ぬ時に同じことを聞かれたら、『僕の最高傑作は娘です』って答えたくって。だからこそ、家族との時間も大切にしています」

決して当たり前ではない日常を、1日1日いつくしむ。その丁寧な積み重ねこそが、人の心をぐっとつかむ豊かな感性を育てているに違いない。



刺し子を裏側から修理することを想定して設けられた、あえて縫い付けない袖口と、背面のスリット



2023年度グランプリ作品(右)、本年度出品のもう一作品(左)と、今作を併せて3部作となっている

鮫革を引き立てる 細やかな手仕事

「鮫革は、独特のテクスチャーがすごく魅力的な素材。この個性を思い切りフィーチャーした作品をつくってみたいとなったんです」

鮫革の表情を引き立てるため、デザインは極力シンプルに。一方、その強い個性に負けないよう、工夫を凝らした細かなディテールも本作の見どころのひとつだ。まず、履き口を縁取る編み込みは、やわらかい牛革を使用しており、足に当たっても痛みを感じないよう配慮している。

「装飾的な意味合いだけでなく、『縫い糸を隠す』という役割も持たせています。素材本来の魅力を引き立てるため、ミシンの縫い目を露出させたくなかったんです。同じ作業の痕跡でも、編み込みという手仕事を選

ぶことで、自然素材との調和を図りました」
さらに特徴的なのは、ソールからコバ※1にかけて施された楕目模様だ。

「編み込みと同じように、自然な形で手仕事感を演出したくて選んだ手法です」

細身のドレスシューズではない、丸みを帯びたカジュアルなシルエットには、「シーンを問わずにたくさん履いてほしい」という菊池さんの想いが込められている。

また、海洋生物である鮫の革は耐水性が高く、雨や湿気の多い日本で長く愛用するにはぴったりの素材でもある。菊池さんはこの靴をハンドソーン※2のダブルソール※3に仕立て、修理をしながらより長く履ける一足として完成させている。

「今作は、今までの出品作品の中で一番、履く人のことを考えてつくることができたと思っています。どんなに斬新なデザインや高い技術があっても、履く人に寄り添えてい

なければ意味がないですからね。今回の受賞を通じて、そのことを強く感じました」

※1 裁断面や縁部分 ※2 手縫いで靴のアップパー部分とソールを縫い合わせる技法 ※3 二重の靴底



フットウェア部門
ベストプロダクト賞

菊池 敏哉さん
KIKUCHI Toshiya

作品名 自然と技の一足



受賞者動画を
配信中!





段ボールから着想 折り畳めるバッグ

「本来、何かを収納するための鞆。それが段ボールという別の入れ物に収納されて運ばれていくのを見ていて、不思議な光景だなんて」

作品づくりのきっかけを、佐藤さんはそう話す。一見、シンプルなレザーバッグ。しかしこの作品のユニークな点は、使用しないときに折り畳んで収納できるという機能だ。

「鞆も段ボールのように折り畳むことができれば、物流コストを下げることができるかもしれない。それが最初の発想でした」

素材に選んだのは、ステア*のヌメ革。これを1mmの厚さに漉いたものを芯材のボール紙にゴムのりで貼りつけ、組み立てている。容易に折り畳めるよう、折り線部分は溝状に薄く削った。段ボールの構造を参考にしたが、やはりそこは革。スムーズな可動性のためには、工夫が必要だったようだ。


「紙でサンプルをつくった時はすんなりいったんですが、いざ本番となると革素材ならではの厚みもありなかなか難しく。カットの仕方など、いろいろと試行錯誤を重ねました」

シンプルなこの作品は、つくり手ならではの技術の結集のように思えるが、佐藤さんは“職人らしいこだわりを持つ”という考え方が、あまり得意ではないのだと笑う。

「誰がやっても同じ品質のものができあがることこそ、ものづくりの現場では大切だと思うんです。それがそのまま生産性につながりますから。そうじゃないと、この業界を志す人が、いなくなっちゃうんじゃないかなって」

制作工程を合理化し、高品質な製品を安定供給できれば、それこそが鞆業界の未来につながるかと考えているのだ。確かな技術を持つ、謙虚なりアリスト。そんな彼だからこそ生み出せる斬新なアイデアに、今後も期待したい。

* 生後数カ月後に去勢して肥育した雄牛の革

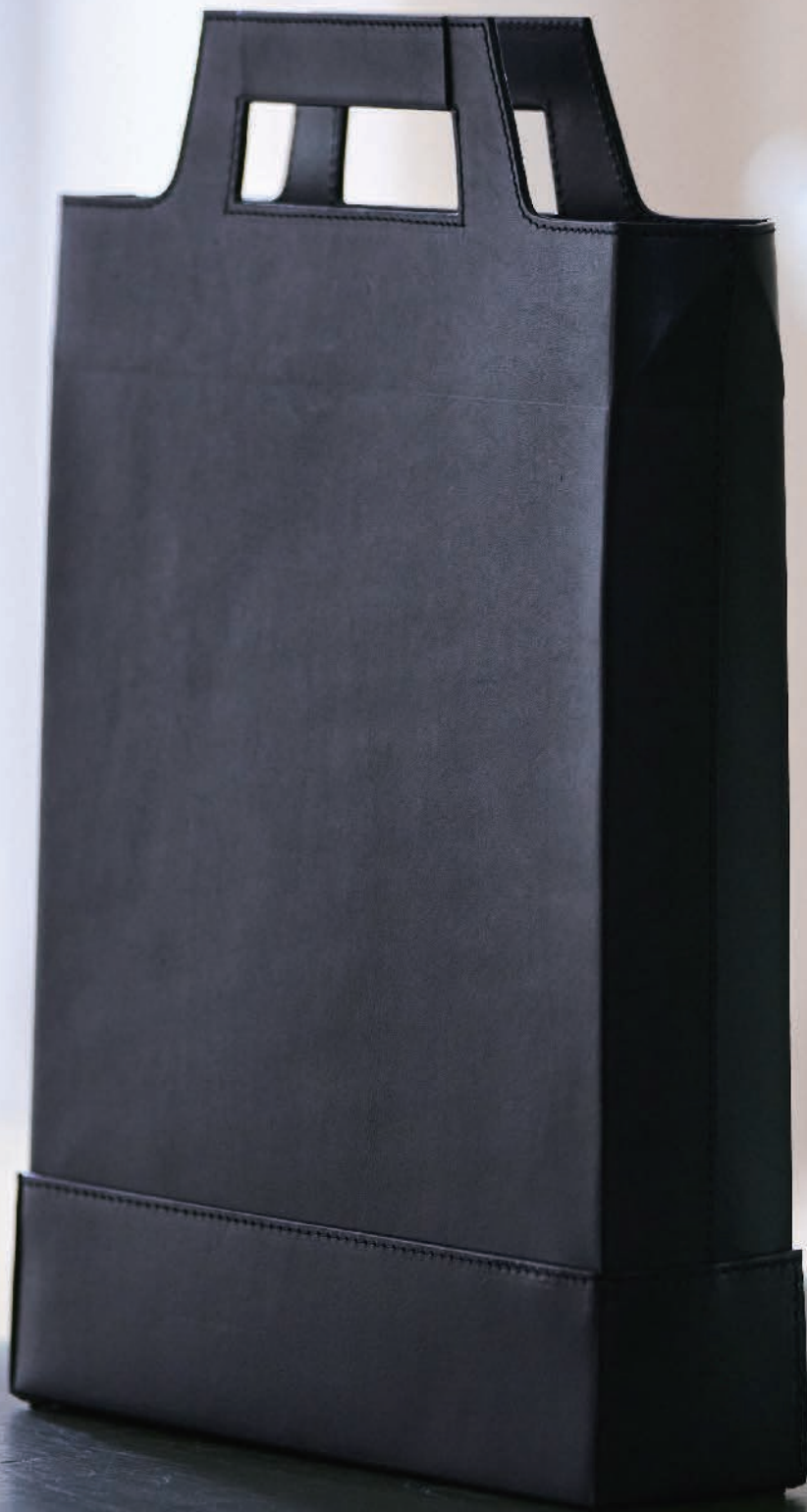
 **バッグ部門
ベストプロダクト賞**

佐藤 周平さん

SATO Shuhei

作品名 **折りたためるレザーバッグ**

所属 **エース株式会社**



孔雀をイメージした 天然素材コート

60年近く皮革衣料の仕事に携わってきた野村さんが、はじめて手掛けた作品だ。

「テーマは孔雀です。優雅に羽を広げる孔雀と、はつらつと生きる女性の姿を重ね合わせてコートを作りました」

全体の意匠はモチーフである孔雀をイメージ。ウエスト紐から裾にかけてはフレアを多めに入れ、裾回りに余裕を持たせて羽が広がるような仕様に。丈は前から後ろにかけて徐々に長くなっており、フレアで波打つシルエットが美しい。革にはパンチングで穴を開け、孔雀の羽の目玉模様を表現している。

また、革だからこそできる裁ち切り仕立てや、立体感を演出する革テープの使用など、手仕事を多めに入れているのも特徴だ。


今作をつくるにあたって選んだ素材は、カーフ、大島紬、鶴岡シルク。じつはこの3つの素材には共通点がある。

「天然素材のみを使用しています。いつか廃棄される時に土に還るものであるべきという思いがありました」

メイン素材のカーフは1.2～1.3mmだった厚みを0.6mmまで漉き、軽さとやわらかさを付与。このカーフをアンティークの大島紬と組み合わせているが、そこにもひと手間が加えられている。

「革と生地は伸び率がまったく違います。なので、裁断したすべての革を濡らし、錘（おもり）をつけて引っ張り、縮みを解消してから縫っています」

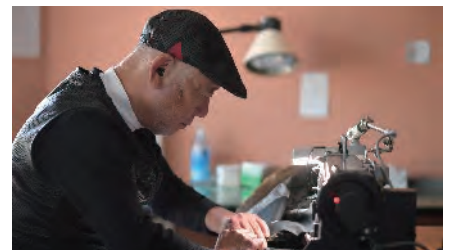
鶴岡市の名産であるシルクは裏地に使用。パンチングの穴から見えるクリーム色のシルクが、デザインとしてよきアクセントになっている。女性の後ろ姿の美しさを引き立て、活力を与えるコートが、ここに誕生した。

 ウェア&グッズ部門
ベストプロダクト賞

野村 孝之さん
NOMURA Takayuki

【作品名】 革ときもの地とのコラボコート

【所属】 革きものアルティジャーノ



受賞動画を
観信中！



制作依頼はこちらから
または
090-9032-1999



遊び心に満ちた 異形なる宅配ボックス

無機質な宅配ボックスにストーリーを与えたい——。そのために能澤さんが採用したのは、木箱に革を貼り合わせるコンビネーション。不規則な模様の型押し革をベースに、ボックスのふちには自身で染色したヌメ革を使用。赤色のカーフに綿を詰めて縫ったものを舌に、小さく裁断した象牙色の革パーツを歯に見立て、不気味さを表現している。「アイデアのもととなるのは、ゲームのダンジョンにいる宝箱型のモンスターです。こんな宅配ボックスが街中にあったら楽しいかもしれない、というイメージがありました」

不穏な雰囲気をもとながらも随所に遊び心が散りばめられている今作は、従来の宅

配ボックスのイメージを軽々と飛び越えている。作品にストーリー性を持たせるために、細部にまで工夫を凝らした結果だ。「力を入れたディテールのひとつは、全体の色のバランスです。革同士はもちろん、革と木を組み合わせる時の配色にも細心の注意を払いました。もうひとつは、作品そのものの重厚感、塊感の表現です。血管が浮かび上がっているような模様の型押し革を使ったことや、台形に切った合板を組み合わせて蓋の曲線をスムーズにしたことなどが、効果を発揮したように思いますね」

加えて、実用面の堅牢度も担保した。「実際に使うだけではなくおもちゃみたいな感じで遊んでほしかったので、頑丈につくりました。ガシガシ開け閉めしたり、手や頭を突っ込んだりしてほしいです(笑)」

自身の作品の傾向として、「既存の物語や

架空の世界の一部を自分なりに解釈して表現するのが好き」と話す能澤さん。作品にも同様のテイストが共通している。



フリー部門
ベストプロダクト賞

能澤 大輔さん
NOZAWA Daisuke

作品名 宅配ボックス

所属 青森県立青森第一高等養護学校



受賞動画を
配信中!



制作依頼はこちらから



現場の声を反映した 新時代のシニア靴

靴の一大産地である神戸市長田で、70年近くにわたり手作業による加工底を製造する藤原化工。約15年前からは、靴の自社ブランドもスタートした同社で専務を務め、シニア向けシューフィッターの資格も持つ藤原さんは、作品づくりのきっかけを次のように話す。「販売先の老人ホームで、生の意見を聞く機会があって。それを既存商品に反映し、進化させることで今回の作品に仕上げました」

まず特徴的なのが、踵の形状。かがむことが難しく、靴ペラも使用しない高齢者でも簡単に履けるよう、足を滑り込ませやすいデザインとなっている。また甲のベルトに指をかけて引っ張ると側面のゴム素材が伸び、

これもスムーズな着脱のサポートとなる。「アッパーのレザーにはやわらかい素材を選んでいるので、長年使用することで次第にご自身の足の形に合ってきます」

特に注目したいのは、藤原化工の技術だからこそできる、繊細なソール加工だ。「接地面を広くして安定性を上げる一方、つま先と踵は、底面を削って一般靴よりも上げています。こうすることで、つまづくことを極力防ぎ、快適な足運びを可能にしました」

通常は平面である中底の形状が、立体成型になっている点も見逃せない。また、靴底本体は衝撃を吸収するためのやわらかい素材、足が直接あたる表面部分は硬くすることで歩きやすくするという工夫もなされている。

さらには、中底を取り外すと丸い穴が現れ、ここに追跡可能なGPSチップを入れれば、履いている人の行く先を安心して見守ること

ができるという仕掛けも隠されている。

長年培われた技術と、現場の声。それらを結集させた、新時代のシニア靴なのだ。



フットウェア部門
フューチャーデザイン賞

藤原 崇晃さん
FUJIWARA Takaaki

作品名 シルバーシューズ

所属 藤原化工株式会社



伝統技法をヒントに 革の個性を装飾に

黒に鮮やかに映える、ランダムな金。日本の伝統技法「金継ぎ」にヒントを得て、ジビエレザー特有の傷を装飾に変えてしまったのが、このトートバッグだ。

「ジビエレザーは野生動物の皮を使うので、どうしても傷が多くなる。これをいかに洗練された商品として仕上げ、革の魅力を伝えられるか考えていた時、陶器の修復技法である『金継ぎ』に出会いました。継ぎ目をあえて装飾として成立させていると知り、革に応用してみることにしたんです」

金継ぎでは、破損部分を漆で修復しながらつなぎ、そこに金を纏わせるが、「一度乾いた漆は硬くなり、力が加わると割れてしまう。そこで、一般的に革に使用されている薬

剤の中から、曲げても割れないものを探し出しました」と、椎名さん。金色の素材は、箔加工レザーの表面に使用されているフィルム状のものを使用。これを漆代わりの薬剤の上に置き、熱を加えながら接着していくことで、“レザー版金継ぎ”を実現した。

今回使用したのは、猪のジビエレザー。原皮に空いた穴を、そのまま生かしてある点もユニークだ。

さらに作品を注意深く眺めると、右下部に並ぶ三ツ星のような金色に気づく。

「ここは、穴というより、革が裂けてしまっていたんです。そこで採用したのが、中国の伝統的な陶器修復手法、『馬蝗祥(ばこうはん)』です」

割れた陶器を金属製の銚(かすがい)でつなぎとめる、馬蝗祥。この技法を使えば、好きな端切れをつなぎ合わせて十分な大きさにすることができると、今後の可能性に

ついても教えてくれた。

見過ごされがちだった素材に新たな価値を与えた画期的な技法。今後のレザー業界に影響を及ぼすであろう秀作である。



バッグ部門
フューチャーデザイン賞

椎名 賢さん

SHIINA Ken

作品名 scratch pattern

所属 Ken Shiina Design Laboratory



受賞作品画を
配信中心



制作依頼はこちらから
417.k.d.lab@gmail.com

伝統的な「茶箱」を革で上質にアレンジ

「茶箱」とは、抹茶を点てるための最小限の道具一式が収められた、携帯用の箱のこと。この作品では、外箱から一つひとつの茶道具を収める小さな入れ物まで、ふんだんに革素材が使われている。

「『茶碗』と、それを温めるために入れたお湯をこぼす広口の器、『建水(けんすい)』。このふたつを収納するための巾着は、豚革で作りました。重ねる際に間に敷く仕切りも、豚のスエード。伝統的にはちりめん生地を使うことが多いのですが、革はほどよい厚みがあるので、緩衝材としてはぴったりでした」

そのほか、『茶杓(ちゃしゃく)』のカバーはソフトな山羊革、『茶筌(ちゃせん)筒』と『茶巾筒』は木目を施した硬さのある山羊革、

主に香木を入れるために使われる『香合(こうごう)』は、シルバーの牛革。見た目と用途のバランスを考慮し、細やかな素材選びがなされている。さらに注目したいのは、外箱。どことなく、クラシカルなスーツケースのような雰囲気を感じさせる。

「アイデアは、まさにスーツケースからきています。最近、内装張り替えの仕事を受けることが多かったんですが、これを茶箱にしたらおもしろいんじゃないかなって」

内装は豚のスエード。外装は、側面が木目調、正面には革織物が採用されている。

「もう20年ほど前になりますが、東京の革織物のメーカーさんで購入したものです。すでに廃業されてしまったのですが、その時の端切れをずっと持っていて。織物は端の処理が難しいんですが、今回は箱ということで縁を押さえる仕様。ぴったりだったんです」

文化も技術も、古きよきものを次代につな

ぎたいと話す河本さん。そんな彼女の想いが詰まった、見どころ満載の作品である。



フリー部門
フューチャーデザイン賞

河本 静香さん
KOHMOTO Shizuka

作品名 革あそびの茶箱

所属 sunao



受賞者動画を
配信中!



制作依頼はこちらから

撮影協力：高知・和の文化発信基地 aiiro あいいろ



受賞者動画を
配信中!



制作依頼はこちらから

端切れを有効活用した 甲冑型ランドセル

ベースはランドセル。かぶせには甲冑に使う小札(こざね)を模した革のパーツが連なり、大マチは鬼瓦風・船箆筒風の模様がにぎやかな。作品名は、「赤色小札黄銅鉾背囊具足」。赤色の小札と真鍮の鉾を用いた背囊(はいのう)、という意味だ。

「そもそもランドセルは日本独自のものなので、和テイストの装飾が合うだろうというイメージがあり、伝統的なデザインを組み合わせさせてかっこいい作品にしようと思いました」

そう話すのは、村瀬鞆行の岡田憲樹さん。同社のフラッグシップモデルである「匠」シリーズを土台に今作を完成させた。

甲冑のイメージを担うかぶせには、ラン

ドセルに使ったコードバンの端切れ革を使用。かぶせと錠前をつなぐベロの大きさに裁断してつなぎ、芯材を貼り付けてからアメ豚革で挟み、一枚革に鉾を打ちつけて留めている。

「革の王様と呼ばれるコードバンの端切れをかき集めて何かできないかな、というのが発想の出発点です。そこから、ランドセルのベロをつなぎ合わせれば甲冑らしく見えるかも、というアイデアが浮かびました」

和風の表現こそ共通しているが、大マチのデザインは甲冑から離れる。左右ともに、鬼瓦風・船箆筒風を模した意匠を凝らしている。「鬼瓦の部分は、盛り芯の上に牛革をかぶせてミシンで縫っています。縫製で鬼瓦風の表情を出すのが難しかったですね」

精緻で巧妙な造形だが、事前にデザインを固めているわけではない。おおまかな方向性を決めて制作を始め、その過程で浮かんだ

アイデアを都度、かたちにしているという。フレキシブルな手法と豊かな想像力によって生み出された快作である。



アーティストックデザイン賞

岡田 憲樹さん
OKADA Noriki

作品名 赤色小札黄銅鉾背囊具足

所属 株式会社村瀬鞆行



椎名 賢さん

SHIINA Ken

作品名 knapsack

所属 Ken Shiina Design Laboratory



即時流通化を条件とする 生産力も評価の一軸に

レザーの作り手が選び抜いたアイテムを提供するオンラインストア「テーマ \ teema」(運営：一般社団法人日本皮革産業連合会)に出品し、国内ECサイトおよび越境ECサイトでの販売に挑戦するカテゴリ。故に本カテゴリへの出品は商品力だけでなく、流通可能な制作体制も条件となる。今回は、部門賞も受賞した椎名さん(P15)の出品作品が見事受賞した。



随所に“馬の骨格”を表現 発想力が光るレザーウェア

「せっかく革を使うなら、作品の構造に動物の形状を反映したい」と考えた吉田さん。素材は牛革、デザインには馬の特徴を取り入れた。

まず目を引くのが、後方に屈曲した膝部分。これは、馬の後ろ脚を表現したものだ。さらにパンツの裾にも、“馬らしさ”を反映。

「ヒールが透明な厚底ブーツを履くことを想定して、踵側の裾をカットしました。踵が浮いているように見えて、これも馬っぽいかな、と」

じつは膝のように見える馬の脚の屈曲部分は踵で、そこから下は足の裏。つま先立ちのようなその骨格を、デザインとして昇華したのだ。

馬の骨格にヒントを得たデザインは、これだけにとどまらない。

「楕円形の胴体を表現するため、胸のドレープをデザインしました」

ベースは細身のシルエットにするため、身体に沿わせるパターンに。その上にドレープのついたレイヤーをかぶせることで、馬らしい“ふっくらとしたフォルム”を実現している。

独創的なコンセプトを、一着のウェアとして見事に完成させた吉田さん。若き才能の今後の展開が待ち遠しい。

吉田 謙太さん

YOSHIDA Kenta

作品名 Fusion

所属 文化服装学院



受賞者動画を
配信中!





多様化されるニーズに応える、物語のあるものづくり

『審査会』『応募作品展（一般公開）』

同時開催：『見つけよう！革の魅力発見展』『ランドセルの軌跡展』

2024年の審査会は9月28日、東京・渋谷ストリームホールで開催された。281点の作品が会場に並び、7名の審査員が1点1点審査。作品とともに付属された各出品者たちのコンセプトシートにもすべて目を通し、どのような背景・物語が込められているのかもチェック。多様化する昨今のプロダクトアウトにおいて、作品をどのようにプレゼンテーションしているかも重要な基準。これらの審査をクリアしたものが、本冊子で紹介した作品たちだ。審査を終えた作品は審査当日・翌日に一般公開、見事受賞した作品は大阪・阪急うめだ本店「b8ta（ベータ）Osaka-Hankyu Umeda」の特設ブースにて展示も行われる。

また、審査会・応募作品展と同時開催となった『見つけよう！革の魅力発見展』『ランドセルの軌跡展』も好評だった。普段見ること、触れることの少ない皮革サンプル（日本革類卸売事業協同組合／日本ゼラチン・コラーゲン工業組合）やレザークラフトのワークショップ（レザークラフトフェニックス）、靴づくりにおける足型診断（全日本革靴工業協同組合連合会）など体験型のイベントから、ランドセルの137年の歴史や制作実演のプログラム（一般社団法人日本かばん協会ランドセル工業会）が開催され、多くの来訪者が参加された。革という素材がより身近にあるのだということを再認識できる絶好の機会となったことであろう。

今年もジャパンレザーアワードを通じて作り手と使い手との接点生まれ、参加者一同、新たな発見とともに、革の可能性を見いだせたイベントとなった。



各審査員、専門性は違えどプロダクトに対する想いは同じなのだろう、例年最終的に大きく評が割れることは少ない。一方、評価したい作品が年々増え、昨年より選定作品の選出が始まった



同時開催となったふたつの展示会には、さまざまな人が参加されていた。特に「ランドセルの軌跡展」には、昔懐かしむ人から、これから選ぶ子どもたちまで幅広い年齢層の方が足を運んでいた



2024

「ジャパンレザーアワード」のロゴは、革素材のイメージを取り入れたデザインです。柔らかなラインを通じて革の持つ質感や可塑性を表現しています。赤色は革が生命に由来する素材であることを象徴し、生命の力強さや温もりを感じさせる基調色として使用しています。

レザークリエイターが一堂に会する祭典

国内レザープロダクトの発展と認知、またプロアマ問わず国内のものづくりにおける新しい人材の発掘を促進すべく始まった国内最大の革製品コンテスト「ジャパンレザーアワード」。今年も今後の皮革業界に限らず、ものづくりにおける次の担い手となるクリエイターたちに多くご参加いただいた。日本のものづくりの伝統だけでなく、次世代へとつながるコンセプトワーク、トレンドを反映したデザインなど、多様な作品が多く集まり、コンペティションとしての進化も垣間見えた。素材への想い、デザイン力、商品力、また新しいアイデアが一堂に会し、2024年を代表するプロダクトが揃った。世情も踏まえた総合的に評価にされた受賞作品たちが、今後どのように市場に進出していくか、乞うご期待。

2つのカテゴリーで評価

ベストプロダクト



日常生活で使用する革製品で、優れた「デザイン力」と、量産品質が確保された「商品力」のある作品

フューチャーデザイン



皮革素材を使用し、今までにない「新規性」が表現されたデザインや機能を提案する作品

【審査員長】



長濱 雅彦
NAGAHAMA Masahiko

東京藝術大学美術学部教授／専門はプロダクトデザイン。日経デザイン記者を経て長濱デザインオフィス設立。グッドデザイン賞、KSP賞、イエローペンシルなど受賞多数。近年は次世代の生活支援ロボットのデザイン研究などを行っている。

【審査員】(あいうえお順)



有働 幸司
UDO Koji

ファッションデザイナー。東京モード学園卒業後、株式会社BEAMS入社。退社後ロンドンに留学。帰国後、国内ブランドの立上げに参加。その後独立し、FACTOTUMをスタートさせる。現在、モード学園の特別講師も務める。



佐藤 泰行
SATO Yasuyuki

婦人靴・婦人雑貨バイヤー(株式会社三越伊勢丹)。マーチャンダイジング部にて婦人雑貨の開発から販売に至るまでのマーケティングを行う。日本のなめし革・革製品の催事、商品開発、インスタライブ配信などのディレクションを手掛けている。



中山 路子
NAKAYAMA Michiko

ファッションデザイナー。2007年よりMUVEILとしてスタートを切る。2012年「ギャラリーミュベール」をオープン。2013年よりグランマをミュージアムにしたジュエリーブランド「グランマティック」のディレクションを手掛ける。



廣田 尚子
HIROTA Naoko

デザインディレクター／ヒロタデザインスタジオ代表／女子美術大学教授。ビジネスデザインを立脚点に企業戦略・インナーブランディング・プロダクトデザインまでを総合的に手がける。RED DOT DESIGN AWARD、IF Design賞、グッドデザイン賞他受賞多数。



政近 準子
MASACHIKA Junko

パーソナルスタイリスト創始者。東京スタイル(デザイナー)を経てイタリアへ移住。帰国後に個人向けスタイリングサービスを提供する「ファッションレスキュー」を設立。政治家、経営者、企業管理職、起業家などの富裕層を主に顧客に持つ。著書12冊。



若杉 浩一
WAKASUGI Koichi

プロダクトデザイナー／インテリアデザイナー／ソーシャルデザイナー。武蔵野美術大学、クリエイティブイノベーション学科教授に2019年4月より着任。1959年熊本県天草市生まれ。九州芸術工科大学工業設計学科卒業。



一般社団法人 日本皮革産業連合会 (JLIA)
JAPAN LEATHER AND LEATHER GOODS INDUSTRIES ASSOCIATION

www.jlia.or.jp